

関本 至先生を偲んで

吉 川 守
(広島大学)

本学会の評議員を長くつとめられた広島大学名誉教授関本至先生は、平成5年5月1日午前11時30分、心不全のため御自宅において御逝去になられました。享年80歳でございました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は明治45年7月4日、和歌山市出身の関本幸太郎氏の御長男として東京市小石川で御誕生になりました。御父堂関本幸太郎氏は東京高等師範学校、数物科の御出身で韓国の太田中学校を創設、初代の校長をつとめられた方とお聞きしている。先生も御父堂との御関係で、太田・釜山、京城の各中学を経て静岡高等学校に進まれました。先生と朝鮮語とのかかわりはこの頃に始まったといえる。広島大学を御退官の後、太田中学校の卒業生から御招待を受け数十年ぶりに太田を再訪された先生は用意された韓国語の挨拶文を読まれた。間違っはなかつたが、古めかしい韓国語だと評されたと笑って話されたことがある。

京都帝国大学文学部に入学されてからは、泉井久之助(助教授)、落合太郎(教授)、田中秀央(教授)、足利淳(助教授)の諸先生から言語学、比較言語学、西洋古典語、サンスクリットなどの御指導を受け、ギリシア語、インドの諸言語への関心を深められたと思われる。

昭和29年(1954年)、泉井久之助先生の編集で朝日新聞社から刊行されたアントゥアヌ・メイエ、マルセル・コーアン監修『世界の言語』の翻訳には関本先生もその一員として参加され、「朝鮮語」、「アイヌ語」、「ドラヴィダ諸語」の三章を訳出された。泉井先生の序によるとすべての訳稿は昭和17年にはすでに提出されていたそうである。関本先生のドラヴィダ諸語への関心はこの翻訳を契機として始まったと思われる。昭和27年には京都大学文学部でドラヴィダ諸語についての集中講義を行われたが、私が言語学科に進学する一年前のことで残念ながら講筵に列することはできなかった。

先生は昭和17年京都帝国大学文学部言語学研究室嘱託、同学部教務嘱託などを経て昭和19年8月から足利惇先生の御骨折で満鉄東亜経済調査局（印度班）に勤務されることになるが、戦局の悪化に伴い、昭和20年12月満鉄が閉鎖され、結局印度におもむかれることはなかった。しかしドラヴィダ諸語への御関心はその後も持続し「ドラヴィダ語の方言研究」（藤原与一編修『方言研究叢書』第2巻、昭和48年）、「ブラーフイー語問題の概観」（『新亜細亞』1月号、昭和20年）その他の論考を発表され、わが国におけるドラヴィダ諸語研究への道をひらかれた。

先生は昭和21年以後、天理教亜細亞文化研究所、天理語学専門学校、天理大学などを経て、昭和27年11月から広島大学文学部に助教授として赴任される。昭和51年に退官されるまで授業では比較言語学、一般言語学、意味論、品詞論、言語学概論を講じられ、古典ギリシア語、ラテン語及びサンスクリットの演習講読を行われた。この間、わが国においては研究者が皆無であった現代ギリシア語、ドラヴィダ語などの研究を推進し、業績をあげられた。現代ギリシア語についてのすべての論考は広島大学に在職中に発表された。最初の論文は「現代ギリシア語の特徴とその発展傾向」（広島大学文学部紀要、7号、昭和29年）で、それ以後「現代ギリシア語の語頭母音の脱落について」（西洋古典学研究、II、昭和29年）、「現代ギリシア語の完了形」（言語研究、30号、昭和31年）、「ギリシアの言語地理学」（方言研究年報、3巻、昭和35年）、「現代ギリシア語名詞句の構造」（広島大学文学部紀要、28巻2号、昭和43年）、「キプロス島の言語——とくにその民衆詩を中心に——」（方言研究年報、13巻、昭和45年）、「現代ギリシア語における重叙表現」（広島大学文学部紀要、35巻、昭和51年）その他の珠玉の論考を次々と発表された。このような御研究を背景に昭和43年泉屋書店より周密厚重的『現代ギリシア語文法』を世に問われた。泉井先生はその序の中で、“わが国において初出の、そしてわが国においてはじめて誇り得るところの、現代ギリシア語の文法的著作である”と絶賛しておられる。広島大学の言語学研究室でもこの文法書の影響で、現代ギリシア語を専攻する本格的な研究者が着実に増えている。

現代ギリシア語への御関心はまた現代ギリシア文学にも向けられ、二度にわた

るギリシア訪問の知見をも加えて、数多くの小説を周到な翻訳によって紹介された。これらは昭和55年に『現代ギリシア短篇小説選集』（溪水社）として一本にまとめられた。愛好者が多いと聞いている。日本では未知の優れた作品が原文より直接紹介された意義はきわめて大きいと思われる。なお、現代ギリシアの言語と文学に関する20篇の論考は、広島文教大学英文学会編、『現代ギリシアの言語と文学』（溪水社、1987年）として出版されている。

御自身の研究とは別に、若手研究者の育成にも終始力を尽くされた。その成果の一つは、昭和46年に、中・四国、九州にまたがる西日本言語学会を創設されたことで、会長として長く地域社会における言語学の質的向上をはかられ、若手研究者育成のために機関誌『ニダバ』を創刊された。現在までに22号が刊行されている。一年に数回開催される運営委員会にはいつも和菓子を持参され、おだやかな笑顔で会の進行を見守っておられた。

先生の温厚で誠実なお人柄はよく知られている。厳格な御家庭で育ちになったせいか、新しい世代のわれわれにはない端正な気品をお持ちで、つねづね羨しく思ったものである。御両親が御健在の頃、外から帰宅された先生は“只今帰りました”と手をついて御両親に挨拶をしておられたそうである。

先生の温顔に接することが出来ないことは淋しいかぎりであるが、後に残されたわれわれとしては、西日本言語学会の質的向上と発展に努力し、現代ギリシア語をはじめとして言語研究に従事する若手研究者の大成を見守って行きたいと思う。

先生の御冥福を衷心よりお祈りします。